



海外
体験記

私は2013年4月より2年間、イタリア・ナポリにあるTelethon Institute of Genetics and Medicine (TIGEM) のAndrea Balabio所長の研究室に留学しております。ナポリはイタリア第三の都市で、「ナポリを見てから死ぬ (Vedi Napoli e poi muori)」という有名な諺があるように、美しい海に燦々と輝く太陽が降り注ぐ風光明媚な土地です。また、人々は陽気で、温暖な気候とピッツアやパスタなどの美味しい食事にも恵まれています。

ナポリに着いた当初は、研究活動とは別に滞在許可証の申請など生活に必要なことがたくさんありましたが、TIGEMは様々な国から研究者を受け入れており、色々とサポートして下さったため、比較的スムーズにナポリでの生活の基盤を整えることができました。私の研究対象であるリソソーム蓄積症をはじめとする遺伝性疾患の基礎研究や治療法開発などは、公的機関や民間組織からの投資が不十分ですが、TIGEMは慈善基金団体であるイタリアのTelethon

Vedi Napoli e poi muori

Telethon Institute of Genetics and Medicine (TIGEM): Naples Italy



TIGEMカルチオメンバー

大学院医歯薬学研究所 創薬生命工学分野(薬学系) 助教

辻大輔 (つじだいすけ)

行ってもお酒を飲むよりも喋っている感じで割と早く彼らと馴染むことができました。私の後にさらにアメリカ人、中国人、オランダ人そしてフランス人がラボメンバーとして加わり、国際色豊かなラボとなりました。ラボでの公用語は英語なのですが、私が時折拙いイタリア語で話すとき皆喜んでくれました。

精進したいと思っております。最後になりますが、今回の留学に関してご尽力頂きました伊藤孝司教授をはじめ薬学部の先生方、またBalabio所長をはじめとするTIGEMのメンバー、そして本稿の貴重な機会を下さった石田竜弘教授にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

研究に関して、Balabio研はシステムバイオロジーの技術を駆使してリソソームの生合成のマスター遺伝子であるTranscription Factor EB (TFEB) と呼ばれる転写因子に着目して様々な遺伝子疾患における役割や治療への応用を行っております。その中で私は中枢神経症状を呈するリソソーム蓄積症の病態におけるTFEBの役割を調べ、神経炎症に関与していることを明らかにしました。研究の立ち上げには苦勞しましたが、Balabio所長やラボメンバーとたくさん議論を行い、最近になって新しい現象を発見することができました。今後は留学経験を活かしてリソソームの生合成やオートファジーに関わるシグナル伝達研究を通じて、神経細胞死において重要な分子を発見しようと考えており、TIGEMとの共同研究を含め、これらの研究を進展できるように



ナポリの街並



TIGEM Ballbio Lab.のメンバー



メンバーとの飲み会

What's happening?



留学生
滞在記

私の日本留学記

栄養生命科学教育部 博士後期課程 3年

阿不都力 玛尔江汗 (アブドリ マルジャンハン) [中国・新疆ウイグル自治区]



ウイグルの伝統衣装で

栄養生命科学教育部博士後期課程2年のマルジャンハンと申します。中国のウイグル出身で、2010年10月から徳島大学で勉強しています。高校生のとき、徳島大学に留学していた叔父に話を聞き、私も「日本へ行ってみよう」と思っていました。中国の大学を卒業してから、その気持ちはよりいっそう強くなり、日本への留学を決意しました。

現在は臨床食管理学分野(前臨床栄養学分野)で、食事の中のリンが生体内の糖代謝および脂質代謝に及ぼす影響に関する研究に取り組んでいます。疾患の予防や治療において、栄養学の介入は非常に大切であることを日々感じており、健康と食との関連性について多方面から学び、研究することができています。私が在籍している研究室では、先生や先輩方が些細なことでも丁寧に教えてくださり、そのようなご指導のおかげで毎日充実した研究生生活を送っています。また、自分の研究成果を国内外の学会で発表するチャンスも与えていただき、研究者としての成長を日々実感しています。

研究室の方々は、研究だけでなく旅行や季節の行事を通して、日本の文化や習慣を楽しく学びな

から、親交を深めることができている。学位審査や試験の後には、研究室の皆さんで私をお祝いしてくださり、とてもうれしかったことを覚えています。恵まれた研究環境の下で、大塚敏英育英奨学財団の奨学生にも採用していただきました。財団主催の交流会では、座禅や落語など日本古来の伝統に触れることができました。交流会当日は非常に寒かったのですが、財団の方が奨学生一人ひとりにカイロをくださったことを、今でも印象深く記憶しています。日本人の思いやり、も

てなしの気持ちの大きさに改めて感動しました。他にも、電車やバスが決まった時間に発着すること、落とし物や忘れ物があっても手元に戻ってくるなど、日本人の国民性はすばらしいと思います。日本での生活も、はや5年！私の中の世界観が大きく広がりました。将来はウイグルに戻り、母国の医療の発展に貢献したいと考えています。数年後の自分の姿をイメージしながら、残りの留学生活では「今できること」に少しでも多くチャレンジしていきたいと思っています。



栄養学科棟前にて



研究室のみんなと春の行楽



アメリカ糖尿病学会参加後(ニューヨークで)